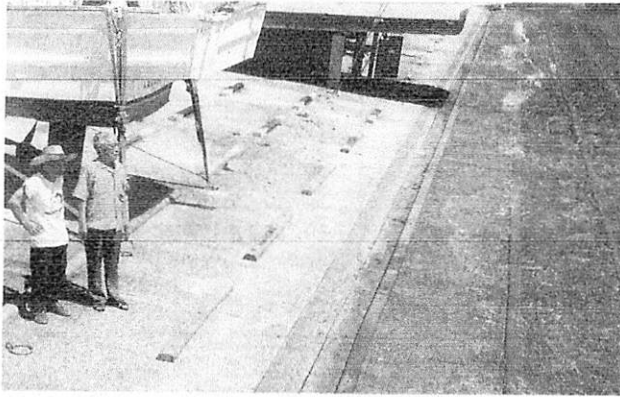


# 戦後70年

## 第2部 苦難の記憶

その日も朝から天気が良く、館山市布良の沖合は春の日差しを受けて青く輝いていた。

布良沖には潜水艦攻撃船「駆潜艇」とみられる艦艇が1隻、爆雷投下訓練の後、一時停泊していた。昼前になり、突然、伊豆半島方面から米軍の爆撃機が1機、低空で接近



死傷者が運ばれた富崎漁港に立つ青木辰一さん(右)ら(館山市布良で)

### ⑦ 布良沖の惨劇

(1945年春)

# 死傷者 地元に残りなし

してきた。爆音と硝煙が上がって、艦艇はあっという間に船尾から沈んだ。

近くの土手で遊んでいた少年たちから「あー爆沈だ」との声が上がる。その中の一人、青木辰一さん(83)(館山市相浜)は「米軍機は旋回して来て今度は機銃掃射した」と振り返る。攻撃は一方的だったという。住民は救助に出ることもできず、目の前で初めて見る惨劇をただ眺めているしかなかった。

一部始終は、その土手近くにあった民防空富崎監視哨からも目撃されていた。監視哨



は敵機をいち早く見つける施設で、14、18歳の少年らが詰めていた。

記録は地元に残っていない。艦艇はそこで何をしていたのか。

監視哨にいた豊崎栄吉さん(86)(同市布良)は双眼鏡で艦艇が攻撃される様子を目撃し、哨長が本部に「布良沖で駆潜艇訓練中」と報告するのを聞いた。哨長の命令を受け富崎漁港に状況視察に出ると、地元漁船に救助された大勢の将兵が運ばれており、「海軍の若い人たちが多かった。血だらけの負傷兵を住民が手当てし、海女さんたちが体で温めていた」と証言する。多数の将兵が死傷したとされるにもかかわらず、惨劇の

東京湾の入り口にあたる布良沖は日清、日露戦争の頃から海軍の演習場となっていたが、当時、県上空では既に米軍機が定期的に偵察活動をしており、危険な状態だった。「そんな場所で訓練するのは理解できない」と豊崎さん。艦艇の乗員は、爆雷で浮き上がった魚をボートから回収していたという。

記録がないため、死傷者数、艦艇の名前、訓練目的は不明のまま。港に行った豊崎さんは「地元の警防団長が負傷

## 館山軍事上の重要拠点

布良沖を含む館山市一帯は帝都・東京の海の入り口という地理的要因から軍事上の重要拠点だった。

東京湾要塞が江戸末期から

明治時代に設置され、終戦まで運用された。布良地区には古くは気象観測や海上監視を担う海軍の施設「布良望楼」が設置され、先の大戦が始ま

者に艦長名を聞いたが、「指揮者死亡」と答えていた」と話す。死傷者は館山海軍砲術学校から来た関係者が運び、地元住民に説明はなかった。

また、惨劇の日時についても、東京大空襲(3月10日)の後から、横浜大空襲(5月29日)あたりまでの間と、特定できていない。

埋もれた戦災の聞き取りを続ける元中学教師の山口栄彦さん(84)(同市大神宮)は「かなりの人が見ているのに日時すらはっきりしない。証言者が出てきたことは全容解明につながる」と期待している。

住民の記憶にのみ残る「布良沖の惨劇」。70年がたち、その過去を知る人も少なくなつた。米軍史料を含め、史実を掘り起こす作業は始まったばかりだ。

と敵機を見つける監視哨もできた。近くの山には海軍のレーダー基地が造られ、布良沖は海軍の演習場にもなっていた。

米軍も布良の陸と海役割を把握し、偵察や拠点攻撃をしたとみられる。